

上演がもつ教育効果をめぐる一考察

On the educational effect a performance has:

中山 文

Fumi NAKAYAMA

（要旨）

2016年6月、中山ゼミ生（2、3、4年次計50人）は桂迎教授の指導する4週間の演劇ワークショップを受けたのち、「信頼」をテーマとした自作の演劇作品をマナビーホールで上演した。自分たちの作品に納得のいかなかった2、3年次生（33人）は新作を作り、7月に2度めの上演会を行った。拙論は2度の振り返りアンケートと1度の観客アンケートをもとに、「演劇作品の舞台上演」が学生に与える教育的効果について考察したものである。その結果、学生たちは作品作りと上演を通して団結力やチームワークを学んだ。またそれは「皆で協力してひとつの事を成し遂げ、達成感を得る」貴重な機会となり、それぞれが新しい自分や友人の一面を発見するきっかけとなった。さらに平常の学校教育に「出番のなさ」を感じている学生たちにとって、授業で主体的に作品を作り、舞台上で観客の視線にさらされることは自己表現の喜びに気づく機会ともなった。演劇上演という面倒な作業は、大学教育においても人間性の涵養に大きな効果を発揮するといえよう。

（Abstract）

This paper considers the educational benefit that students can acquire from the experience of staging a play. Through the process of creation, students are provided with a valuable opportunity to learn teamwork, cooperating with friends to achieve their common aim. Besides, these activities make them aware of the joy of self-expression. This suggests that the practice of staging at university contribute to enhance students' personality and their social skills.

キーワード：舞台上演、創作と演技、達成感、自己表現

Key Words : staging a play, creation and performance, a sense of achievement, self expression

はじめに

近年、演劇の表現手法を通してコミュニケーション能力を育成しようという試みを取り入れる学校が増加しているが、それは文科省の方針にも沿ったものである¹。筆者も過去2007年、2012年、2016年の3度にわたり、中国学生演劇指導の第一人者である桂迎元浙江大学教授を招聘し、教育現場における演劇ワークショップの効用について共同研究を行ってきた²。

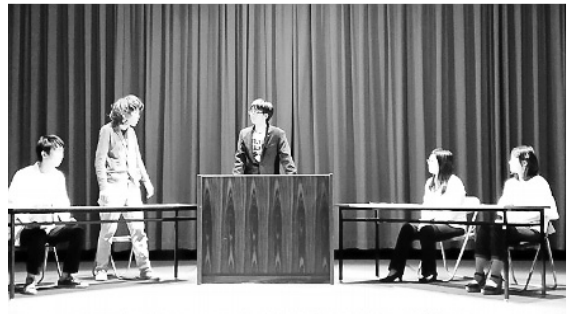
2016年度、中山ゼミ生（2、3、4年次計50人）は桂迎教授の指導する3週間の演劇ワークショップを受けたのち、「信頼」をテーマとした自作の演劇作品をマナビーホール³で上演した。ワークショップと第1回発表会内容及び学生たちが第2回の発表会を熱望した経緯については、すでに別稿で述べた⁴。拙論は2度の振り返りアンケートと1度の観客アンケートをもとに、「演劇作品の舞台上演」が学生に与える教育的効果について考察したものである。

Ⅰ. 第1回上演発表会（6月2日、3日）について

1. 第1回発表会振り返りアンケートから

第1回の上演終了後、各学年のゼミ授業で「第1回発表会振り返りアンケート」を行った。内容は、①作品に対して、振り返りと反省②自分に対して、振り返りと反省③メンバーに対して、振り返りと反省④再演したいですか？（3年次生のみ⁵）⑤上演を通して自分の変化⑥上演を終えての感想（すべて自由記述）である。紙面の都合により、以下に抜粋して示す。

①「作品に対して、振り返りと反省」では、2、3年次生の各班が台本・演出・スタッフワークのすべてに「練習不足・時間不足」と反省点を挙げたのに対して、4年次生は満足度が高い(写真①)。「(台本) 2週間で書き上げたため、深い話ではなかったが、ドラマティックなものになったのではないかな?」と思う。・シリ



写真① 6月3日 4年次生『信頼』

アスな状況の中に、コメディをぶち込んだ面白い内容だった。(演出)・裁判劇であったため、あまり激しい(大きい)動きではなく、細かい動きで観客に伝わるように努力した。・少ない人数ながら、意見を出し合って調整していきました。(俳優)・皆がだんだんと、乗り気になっていくのを見ていて面白かった。(スタッフ)・音響や暗転のタイミングがこの芝居をしっかりと支えてくれていたのだと思います」等である。就職活動や教育実習の合間を縫ってできるだけ授業に参加したことへの自己肯定感が強く感じられる。

②「自分に対して、振り返りと反省」でも4年次生とそれ以外では大きな差が見られた。2、3年次生は「一生懸命台詞の練習をしたのに、失敗してしまい悔しいです」(2年次生)、「台本をもっと読み込んでいれば良かった。アドリブの際、自然に出来れば良かったと思う。動きの反復練習、発声トレーニングなど、早めにやっておけば良かった」(3年次生)

のように、自分自身の演技での失敗を挙げている。だが、4年次生には「予定が合わず、練習に参加することがあまり出来なかった」という反省が最も多かった。多忙な中、少しでも参加しようとしてくれた4年次生メンバーの熱意を評価したい。

③「メンバーに対して、振り返りと反省」では、各学年の感想に大きな差はない。これまで知らないでいた友人の一面を見たという感想がいずれの学年でも多い。「メンバーの人柄がよくわかった」「それぞれが役割をしっかりと理解しており、勉強以外の面での真剣な表情が見られた」（2年次生）、「メンバーのアドバイスには本当に助けられました。また、ムードメイカー・努力家・責任感ある行動などなど、それぞれの良い面がたくさん垣間見られたのも良かったです」（3年次生）、「忙しい中、互いに意見を出し合い、それぞれが出来ることをしようと努力していたと思います」（4年次生）という感想である。

④「再演したいですか？」については、「次は音響・照明にもこだわり、小道具もきっちり準備しておきたいです。あと、もう少し人数も欲しいです」「もう少し練習時間と上演時間を長くとりたいです。」「今回は何もわからないところから始まり、他の班がどのような作品を、どのような練習で作っているのか見ている余裕が全くなかった。次は、他の班の良い点や、参考になりそうなところを吸収していきたい思う」という意欲的な感想が目についた。

⑤「上演を通しての変化」への回答には、いずれの学年でもゼミ内でコミュニケーションをはかる良いきっかけとなったというものが多い。「人前で話すことへの苦手意識が、少し、和らぎました」（2年次生）、「少し、恥ずかしさに打ち勝てたと思う」（3年次生）「今まであまり話したりしていなかった人とも、自然と話している自分がいた」（4年次生）というものだ。

⑥「上演を終えての感想」では、「楽しかった」「もの作りの難しさを改めて実感した」「達成感を味わった」というものが多かった。「今回の授業で、皆と力を合わせて1つのものを作る、という楽しさを知りました。集まって、相談して、時には口論して、その過程がとても楽しかったです。本番はとても緊張しましたが、終わった時の達成感は気持ちの良いものでした」（3年次生）という感想が代表している。

本来、ゼミ生の積極性を引き出すことを目的に始めた演劇ワークショップである。これだけでも、ゼミ教育を行う上で教育効果はあったと言えるだろう。だが演劇上演が学生に与えた影響はこれだけでは止まらず、さらに思いがけない展開が待っていたのである。

2. その後の展開

「演劇作品を舞台上演する」という魅力がゼミ生に与えた影響は、筆者の予想をはるかに越えていた。4年次生の上演録画を観た上で振り返りを行った2、3年次生たちは、演劇が総合芸術であるということを実感したようだ。照明や音響などのスタッフがいてこそ、キャストが生きる。それは1人で完結する文学作品と集団で作上げる演劇作品との大きな違いである。スタッフワークの重要性を深く意識した彼らは、再度自分たちで演劇作品を作り、第2回発表会を行うことを熱望した。3年次生は全員で1作品を、2年次生は2人の演出家による2作品を作りたいと言う。そこには4年次生の作品が大きく影響し

っていると筆者は考えている。この時の彼らは、4回生のような満足感、達成感をまだ得てはいなかったのだ。

前回の発表会は、教師の立てた計画に従う授業の一貫だった。だが今回、彼らは自分たちから「やりたい」と言い出した。桂迎教授の手を離れた後、演劇素人の自分たちだけでどこまでできるのか。それを試して実感させることも教育だろうと考えた筆者は、彼らの要求を受け入れることにした。教師の役割は稽古場を押さえ、照明や音響などの設備の使い方を専門の職員の方に教えてもらう日時を設定するだけに止め、現場の仕事はすべて学生に任せることにした。相談の末、前期の最終日に第2回上演発表会を行うことになった。

桂迎教授は学生の決断をたいへん喜び、浙江大学黒白劇社で育んできたノウハウを惜しげもなく教えて下さった。その第一が宣伝である。演劇が演劇として成立するためには観客が必要で、集客のためには宣伝が必要だという基本的なことも私たちは認識していなかったのである。手探りで準備を始めた。宣伝用のポスター（資料）、チラシ、パンフレット、アンケートを作成し、桂迎教授のアドバイスに従いご父兄にも案内状を出した。稽古場の予約、当日の受付、司会、アンケート用紙の準備、撮影班……やるべき仕事が続々と思いつき、「制作」という仕事が必要になった。これは上演までに次々と生まれてくる雑用を処理し、適宜仕事を振り分け、密接にキャストと連絡を取るたいへん面倒な役職だ。3年次生のTさんがすすんでこの役割を引き受けてくれ、2年次生は演出家2人がそれぞれのメンバーへの連絡係となった。

7月25日（月）の18：00から、マナビーホールで3年次生が1本、2年次生が2本の作品を上演した。

Ⅱ. 第2回上演発表会について

1. タイムテーブル

帰国された桂迎教授からは、今回の発表会を「イベントとして完成した形に仕上げるように」とのアドバイスを受け、以下のようなタイムテーブルを作った。

①主催者挨拶

17：15－17：20 中山

②上演

17：25－17：45 『いつまでも隣に』（2年次生）

17：50－18：10 『ぼくらの』（2年次生）

18：15－18：50 『信頼教室』（3年次生）

③アフタートーク

18：50－19：00 出演者感想

19：00－19：10 客席交流

④講評

19：10－19：15 伊藤茂先生

まず主催者の趣旨説明があり、上演が行われ、その後にアフタートークを行い、有識者の講評を行う。これは中国で行われている学生演劇フェスティバルと同じ構成である。

この会を滞りなく行うためには、開会・閉会の挨拶をする司会者が必要になるが、司会役を担った3年次生Wさんは堂々と上演会を進めた。自分が全体のために果たすべき役割を与えられた時、学生は大きく成長する。筆者はここでも長年桂迎教授が指導されてきた黒白劇社の経験が生かされていたことを知らされたのだった。

2. 上演作品について

上演作品は2年次生の『いつまでも隣に』（写真②）、『ぼくらの』（写真③）の2本と3年次生の『信頼学校』（写真④）の計3本である。『いつまでも隣に』は絵本『100万年次生きたねこ』からヒントを得たオマージュ作品。衣装係のK君が張り切って猫耳を手作りした。『ぼくらの』は過去から来た少女を過去に帰すために必要なパズルのピースを、力を合わせて集めようとする青春スクールラブコメディだった。いずれもそれぞれの演出家が脚本を書き、メンバーの意見を取り入れて作り上げた。

3年次生の『信頼学校』は前回の上演時から桂迎教授に「この台本を残し、もう一度全員で上演すればよい」と勧められたものだ。そのことを学生たちには伝えていなかったのだが、振り返りを行った時に学生たちの方から「この作品をみんなでやりたい」と意見がまとまったのである。

あらすじは「ここは“信頼”が将来を左右する世界。信頼度を上げるほど、より良い進学先・就職先に進めるのだ。そんな世界のある高校に、高い信頼度を誇るクラスがあった。彼らは3年間共に学び、自分たちの“信頼”はゆるぎないものだと思っていた、そう、坂本が来るまでは一。新任教師坂本が突然始めた「信頼ゲーム」によって、彼らの“信頼”が少しずつ崩れ始める。彼らが最後にたどりつくところとは？」（パンフレットより）である。作品のテーマにいじめ問題が絡み、前回の発表時よりも格段に重厚な作品に仕上がった。



写真② 7月25日 2年次生にゃんこ班『いつまでも隣に』



写真③ 7月25日 2年次生ペンギン班『ぼくらの』



写真④ 7月25日 3年次生『信頼教室』

3. 「中山ゼミ演劇発表会 観客アンケート」結果（資料①）

宣伝の効果があったのか、当日は120人以上の観客を集め、71人のアンケート回答を回収できた。アンケートでは観客の性別、年代、所属のほか、公演についての感想、一般学生がゼミで演劇作品を作る試みについて、このような試みに参加したいかどうか、公演の宣伝についてなどを尋ねた。

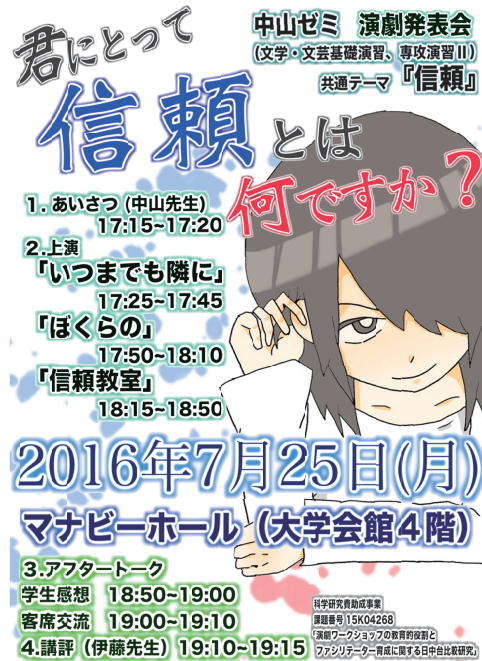
それによると、観客の男女比は男性33人、女性38人。年代割合は3年次生31人、2年次生24人、4年次生9人、その他7人。所属割合は人文学部65人、教職員4人、その他2人である。以下の結果は、ほぼ人文学部学生のこの催しへの感想だと考えてよからう。

Q4・Q5の上演作品については、「演劇部ではなくゼミでやっていることがすごいと思いました。3年次生の作品は最初から最後まで教室の場面なのにとっても惹きこまれました。」「ゼミ生とは思えない演劇で、とても面白かったです。」という嬉しいものが多く、学生たちの励みになった。

興味深いのは、Q6「一般学生が演劇作品を作ることに対する」評価とQ8「演劇作品制作への参加意欲」評価の齟齬である。前者に対しては、「たいへん良いと思う」（52人）「良いと思う」（19人）とアンケート記入した全員が今回の試みを高く評価している。具体的には、「ゼミといっても全く話さない人もいるので、こういった機会は仲良くなれていいものだった。（3年次生男性）」「ゼミ内の仲が良くなる。今回は“信頼”をテーマにされていたので、信頼とは何かみんなで考えながらできるところ。（3年次生女性）」「団結して作るといい経験にもなるし、達成感を感じるからです。（3年次生女性）」という感想である。

だが、後者では「参加したい」（29人）「参加したくない」（29人）「どちらともいえない」（7人）である。回答しないということは、少なくとも意欲的ではないのだろう。されば、半数以上が参加を望んではいないことになる。「楽しそうだし、1人1人の個性が出ているから。また、同学年の人が頑張っている姿を見て、私も頑張ろうと思えるから。また、私もやってみたい！」と思えるから。（3年次生女性）」という感想もあったが、やはり見るのと演るのとでは大違いなのだ。

「その他の意見・感想」では教職員からは「学生が確実にのびると思いました。輝いていました。本当の輝きでした。」「成長・発達のよい機会になる。」「学生が強くなったから。」という評価をいただき、たいへん心を強くした。だが、ゼミ生全員で演劇上演を行うことの意味を徹底し、演劇ワークショップを重ねて体を動かすことをしていなければ、上演はできるものではないことを確認したアンケート結果であった。



資料① ポスター（高瀬智作）

中山ゼミ演劇発表会アンケート

◇お客様についてお聞かせください

- Q1. 性別 ☐ 男性 ☐ 女性
- Q2. 年代 ☐ 1回生 ☐ 2回生 ☐ 3回生 ☐ 4回生 ☐ その他（ ）
- Q3. 所属 ☐ 神戸学院大学・人文学部 ☐ 神戸学院大学・他学部
☐ 神戸学院大学・教職員 ☐ 神戸学院大学・父兄
☐ 他大学・専門学生 ☐ その他（ ）

◇本日の公演についてお聞かせください

- Q4. 本日の上演作品の中でどの作品が面白いと思われましたか？（複数回答可）
☐ 「いつまでも隣に」（2回生にゃんこ班） ☐ 「ぼくらの」（2回生ペンギン班）
☐ 「信頼教室」（3回生） ☐ 全ての上演作品

Q5. どのようなところが面白い、または改善したほうがよいと思われましたか？

[]

Q6. 一般の学生がゼミで演劇作品をつくるこのような試みをどう思われますか？

- ☐ 大変良いと思う ☐ 良いと思う ☐ あまり良いと思わない
☐ 良いと思わない

Q7. なぜそのように思われますか？

[]

Q8. 学生の皆さんにお聞きします。あなたも参加したいと思われましたか？

- ☐ 参加したいと思った ☐ 参加したいと思わない ☐ どちらともいえない

Q9. 本日の公演を何でお知りになりましたか？（複数回答可）

- ☐ 先生からの紹介 ☐ チラシ・ポスター ☐ 友人・知人からの紹介
☐ フェイスブック・ツイッター ☐ その他（ ）

Q10. ご来場いただいた理由を教えてください。

- ☐ タイトル ☐ 企画内容 ☐ チラシ・ポスター ☐ 友人・知人の勧め
☐ その他（ ）

◇その他 ご意見・ご感想があればご自由にお書きください

ご回答ありがとうございました

資料② 「中山ゼミ演劇発表会 観客アンケート」

4. 3年次生への「第2回発表会振り返りアンケート」

7月25日の上演後はすぐに試験期間に入ったため、2年次生にはアンケートを行う時間が取れなかった。そのため、3年次生のみを対象に自由回答のアンケートを行った。内容は、「1. これまでの舞台経験について 2. 演劇について①もともと演劇に興味がありましたか？劇場へ演劇を観に行きますか？②今はどうですか？ 3. ゼミで演劇作品を創ると知り、どう思いましたか？①1回目（4月）②2回目（6月） 4. 2回目の発表会についての反省です。①自分たちの作品について②自分の職務について③発表会の構成について④宣伝について（手紙、ポスター、チラシ、SNS、授業での動員など） 5. 演劇作品創作を2回やってみての感想です。①2回やってよかったですか？1回目と2回目で、どんな違いがありましたか？②自分の担当した職務について、思うことを書いてください。③担当職務を全うする上で、自分の出したアイデアを具体的に書いてください。④一番困ったことは、何ですか？⑤2回の作品創作を通して、あなたは何を学びましたか？⑥2回の作品創作を通して、あなたは何が変わりましたか？自分について発見したことはありますか？⑦またやりたいと思いますか？次はなにを担当したい？抱負をどうぞ。⑧演劇作品創作によって、どのような力がつくと思いますか？⑨桂先生に伝えたいこと。⑩その他、言い残したことを自由に書いてください。」紙面の都合により、以下に抜粋して示す。

1「これまでの舞台経験」については14人が何らかの経験あり、2人がなしだった。経験ありは全員小中学校の授業である。2「演劇への興味」については、もともと興味あり8人、興味なし・無回答8人だった。だが実際の観劇経験については年間2回～3回観劇する者は2人に過ぎず、あまり観ないが8人（今までの観劇経験 1回が1人、2回が4人、3回が1人、無回答が2人）、一度も劇場で演劇を観たことはない者は6人に及ぶ。中山ゼミ3年次生は、もともとけっして演劇に強い興味を持つ集団ではなかったと言えるだろう。そのため、3「ゼミで演劇作品を作ると知った時の反応」は、①1回目は「不安、緊張、面倒」という否定的な回答が12人で「楽しみ」という回答4人をはるかに越えている。だが②2回目は「・意外と面白い。全員でやればもっと凄いものが出来そう。」「みんなで何かを作ることが楽しくて、終始ワクワクしていた。」という積極的なコメントがずらりと並んだ。

4「2回目の発表会について」の①作品については「個人的にはそれなりの完成度の高い劇ができたのではないかと、思っています。暇な時間に集まって練習をして、声の出し方なども教えてもらって、自分たちの努力と精一杯の力で、できる限りの形にして作り上げた作品だったと思っています。」という意見が代表するように、達成感が高い。②自分の職務については、「みんなの協力のおかげで成し遂げられた。自分の意見が取り入れられ、素晴らしい形で前に出てきて嬉しかったし、楽しかった。」という感想に注目したい。話し合いの中で自分の仕事が明確になり、親密になっていく様子が目に浮かぶ。③構成については、自分たちが「とり」となったことへの緊張と誇らしさが感じられた。④宣伝についてはポスターの完成度とSNSによる宣伝効果に言及したものが多い。

筆者がもっとも知りたかったのは5-⑤「2回の作品創作を通して、あなたは何を学びましたか？」と5-⑥「2回の作品創作を通して、あなたは何が変わりましたか？」とい

う項目である。16人の自由回答は以下の通りだった。

5-⑤「2回の作品創作を通して、あなたは何を学びましたか？」について

・普段やることの無い演劇という違う世界のことを知り、その難しさや面白さを、身をもって学べたと思います。なかでも、ゼミのメンバーで行ったということが大きかったと思います。普段では感じることの出来ない団結力や結束力、チームワークなどといった、あまり深く感じることの出来ない大切なことをこの作品創作を通して学ぶことができたと考えています。・決められた中で自分の伝えたいことを表現する難しさと、良いものをつくるには妥協してはいけない、ということ。・ありきたりの言葉だが「団結力」・1つの作品を作るには、監督・脚本家・演出家・役者・照明・音響・黒子など、それぞれの支え協力があったこそだということが分かりました。また、時間が非常にかかるので、みんなという時間も長い分、以前より仲が良くなったように思います。・人の意見を受け入れつつも、自分の意見をしっかりと出していくことは大事。・本番は、気合で何とかなること。・表現することの難しさと楽しさを知った。また、全員で団結することの大切さ。・裏方はかなり大事だなと思いました。・みんな一生懸命にやって、成功したこと。意見を出し合って討論したこと。・一緒に作品を作る仲間のために何ができるのか、考えるようになった。・チームで動くことの重要性。・全員で1つのものを作り上げる大変さと楽しさ。作品創作はキャリアとは違い、自分の心の扉を開くということ、無意識にできると思った。・1つのものをつくるために個々が自分の役割を全うすることの大切さ。・協力・演じること・チームワーク。・台詞と動きで感情を表現することの難しさです。・みんな1つのことをすること。大変なことほど、楽しいし、できたら嬉しい。感動する。

5-⑥「2回の作品創作を通して、あなたは何が変わりましたか？」について

・自分は正直、目立つということはあまり好きではありません。そのため、こういったことでも裏方などといったほうがやりがいを感じていたのですが、いざ舞台に立つことになる、自分でも思っていた以上に真剣に取り組んでいたと思います。今でも、目立つことは好きではありませんし、何かあれば裏方のほうが良いと思いますが、それが絶対のことでもないのだ、と気付かされました。・思っていることをきちんと相手に主張できるようになった。また、主導権を握って物語をつくることは苦手だが、横から解決策や助け舟を出してサポートするのは得意なのではないか、と思った。・まだ自分が変わったところは分からないが、いつか分かる時が来ると思う。発見したことは、やはり3年次生はみんな、とにかく仲が良いということ。・1回目よりも2回目の方が、自分をさらけ出して演技ができたと思います。発見したところは、演技に対してまだ、恥ずかしさがあるので自分が残ってしまうことです。・自信がついた。1つの物語を形として、たくさん残していきたいと思った。・特に変わると気付いたことはない。演劇は苦手だけど、本番はある程度はできた。・声の出し方などの細かいことを知り、あまり好きではなかった演劇の楽しさを感じられた。・人と協力すること。・人前で何かをするのに良い緊張感を持って全力を出せたこと。・少しは協調性が身に付いたと思う。・チームを円滑に動かせるように立ち回るようになった。全体を見るようになった。・みんなに対して、本音というか本心を話すことができるようになった気がする。より、自然体で振る舞えるようになった。

た。・俺は変わらない！・小・中学校の時、役者になりたかったことを思い出しました。でも、やはり私にはその度胸が足りないな、と感じました。・間違っているとも良いから、まずは意見を言うよう努力した。自分についての発見は「何でもやりたがり」。

5-⑤では「団結力や結束力、チームワークの重要性を学んだ」という意見が多い。5-⑥では「新しい自分の発見」に言及したものが多い。どうやら舞台での演劇上演はコミュニケーション能力のほかにも、多くのものを彼らに与えてくれたようである。その勝因は、彼らが演劇上演には多くの煩雑な仕事に伴うこと、そしてそれぞれ自分の役割を遂行しなければ目標を達成できないことを学んだからであろう。桂迎教授からのアドバイスのおかげで、前回よりもはるかに教育効果の高いものとなったことを記しておきたい。

Ⅲ. 考察

今回の試みは「演劇作品の舞台上演」が学生に与える教育的効果を考える上で、以下の3点を筆者に教えてくれた。

①舞台上演のもつ教育的有効性

小中高校では60年代からすでに演劇教育に熱心に取り組む先生たちがおられた。近年、文科省からの追い風を得て、演劇ワークショップのあり方を模索する若い先生方の研究会が増加しているようである。その中には「上演は必要としない」という意見も見られる⁶。

だが筆者は今回の「上演＝人に見られること」によって、彼らが大きく成長することを目撃した。具体的には自信、達成感、追い詰められた時の思いがけない力、樂觀性、反省から生まれるアイデアなどである。さらに、その過程が生み出す多くの仕事は、「1人ではできない」ことを実感させた。またメンバーとの討論を通して作品を読み込み、自分の思考が深まった。そしてなによりも人間関係が親密になった。3年次生は夏休みに全員で花火大会、鳥取旅行を企画し、その後もゼミ内で人間関係を深めていった。それは後期が始まった時のゼミの雰囲気如実に表れた。このまま就職活動、卒業研究という4年次の最大の難関に積極的に、明るく向かってくれることを祈っている。

②機会の必要性

2度の上演会から、筆者は学生たちが「表現する機会を求めている」ことを強く感じた。彼らは「自分を変えたい」という思いを確かに抱いているのだ。だが自ら手を伸ばす意欲を見せたり、人より目立つ行動はしたくないのだろう。だから、「授業だから、しかたないなあ」という半強制的ムードの中で、何かに出会い、変化し、成長することがとても望ましいのである。そういう機会に出会ったとき、彼らはこれまで考えもしなかった積極的な一面を見せてくれる。教師にできるコミュニケーション能力を鍛える方法とは、彼らが積極的に動かざるを得ない場をもっとたくさんセッティングすることに尽きるのではないか。

③経験者のアドバイス

今回の試みは、大学生の教育演劇において豊富な経験を持つ桂迎教授の指導がなければありえないものだった。後日、第2回発表会の録画を観た桂迎教授から感想が届いた。その文章からも、指導者として学ぶべき点をいくつも感じ取ることができるので、以下に引

用したい。

「『信賴教室』観劇の感想」 桂 迎

神戸学院大学人文学部のキャンパス演劇『信賴教室』第2版を観たのは帰国後の事である。非常に驚いたのは、目の前で繰り広げられる作品の舞台全体がとても完成したものだったこと、そして学生たちの演技が格段にレベルアップしていたことだ。第1版と比較すると、台本のアイデアが大学生の精神世界に深く触れるものになり、学生たちが他者への信賴を心から渴望していることが良く伝わるものになっている。物語の起承転結は理にかなっており明確で、舞台場面の切り替えも自然に行われ、これがゲームなのか現実なのかという虚実がないまぜになり深い奥行きを見せた。

学生の演技については、自分たち大学生の役なので、素朴で自然な演技ができている。人物の性格は多彩で情感にあふれており、無理なく場面を動かしていく。事件の主要人物たちはキャラクターが立っており、周囲の人々の反応も正確でたいへんリアルである。

欲を言うなら、舞台表現をイメージする経験が不足しているために、リアリズム表現にとらわれ過ぎていたことである。ゲームの中で人物が突然消され、周囲が驚愕と恐怖に陥る場面では、もっと面白い演出も考えられたろう。

だが私を何より喜ばせのは、これが学生たちの選択であり、人生への内省を大胆に演劇化した初の体験であり、グループ創作の初の成功作だということだ。多くの人が心を合わせて協力し、一つの事柄を成し遂げた。これは彼らの大学生活にとって必ず最も忘れがたく美しい思い出になることを私は信じている。

中山文先生がこの意義深い教育実践を完成されたことに、お祝い申し上げます。また自分自身にも慶びの言葉を贈りたいと思います。教育演劇の理念を持ち、中山先生とともに、日本の学生たちに演劇世界という大きなドアを開くことができたこと、そして彼らが力を合わせて努力し成功した瞬間を目にすることができたことに。さらに学生たちにも。美しい大学時代に、全員で参加し、協力して作り上げた経験。この得難いキャンパス演劇の体験について心からお祝いを申し上げます。みなさん、本当におめでとう！

おわりに

平常の学校教育に「出番のなさ」を感じている学生にとって、今回の試みはたいへん有意義なものだったと考えている。だが、演劇活動が必ずしも常にすべての学生たちに歓迎されるとは限らない。現に、「第2回発表会振り返りアンケート」によると、あれほど達成感を味わった3年次生でさえ、「3度目の上演をやりたいか？」という質問には75%しかYesと答えていない。第1回発表会振り返りアンケートでは、100%の人間がYesと答えたにもかかわらず、である。今回の上演はそれだけの「しんどさ」を伴うものだったに違いない。しかしその「しんどさ」を知ったからこそ、彼らは達成感を得、自分の成長を信じることができたのであろう。

第2回上演発表会の講評で、伊藤茂教授は以下のように述べた。

「演劇ワークショップをして作品を創
るというのはたいへん手間のかかる、し
んどいことだ。……だが君たちがしんど
いけれど楽しかった、面白かった、すご
く役に立ったというふうに、肯定的にい
ろんな人に伝えて、こういう雰囲気が、
学部・学科全体に広まれば良いなあ、と
思っていますし、願っています」。



写真⑤ 7月25日 全員集合写真

「しんどいけれど楽しい」と感じる経験を、筆者は今後どれほど学生に与えることがで
きるだろうか。それこそが今後のゼミ運営の課題だと考えている。(写真⑤)

参考文献

- 中山文・伊藤茂・桂迎「心のコミュニケーションを創造する演劇教育空間について ―神戸学院大学及び
関西地区高校演劇部におけるワークショップの記録と思考―」人文学部紀要第28号 2008年
「芸術表現を通じたコミュニケーション教育の推進」―登録：平成22年05月―文科省HPによる。
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/commu/1289958.htm
佐藤信『演劇教育とワークショップ ―学校という劇場から』論創社 2011年
渡辺淳＋獲得型教育研究会編『学びのウォーミングアップ70の技法』旬報社 2011年
中山文・桂迎「ゼミ教育における演劇ワークショップの実践と効果 ―黒白劇社指導者桂迎教授をお迎え
して―」教育開発センタージャーナル第4号 2013年
中山文・桂迎「ゼミ教育における教育演劇の実践と効果―演劇ワークショップからホールでの上演発表会
へ」『教育開発センタージャーナル』第8号 2017年3月

注

- 1 「芸術表現を通じたコミュニケーション教育の推進」―登録：平成22年05月―文科省HPによる。
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/commu/1289958.htm
- 2 中山文・伊藤茂・桂迎「心のコミュニケーションを創造する演劇教育空間について ―神戸学院大学
及び関西地区高校演劇部におけるワークショップの記録と思考―」人文学部紀要第28号 2008年
中山文・桂迎「ゼミ教育における演劇ワークショップの実践と効果 ―黒白劇社指導者桂迎教授をお
迎えして―」教育開発センタージャーナル第4号 2013年
- 3 神戸学院大学有瀬キャンパス大学会館4階にある多目的ホール。収容数は可動式の客席377席。
- 4 中山文「ゼミ教育における教育演劇の実践と効果 ―桂迎先生の演劇ワークショップから発表会へ」
『教育開発センタージャーナル』第8号 2017年3月
- 5 この後4年次生は卒業、2年次生は新たなゼミ分けが行われるため、同メンバーでの再演の可能性の
あるのは3年次生だけだと考えた。
- 6 佐藤信『演劇教育とワークショップ ―学校という劇場から』論創社 2011年 p174－p195、高山昇
「演劇を学ぶ」ということ～創作脚本上演の授業」

謝辞

本論文は、JSPS 科学研究費 JP15K04268 の助成を受けた研究の一部である。